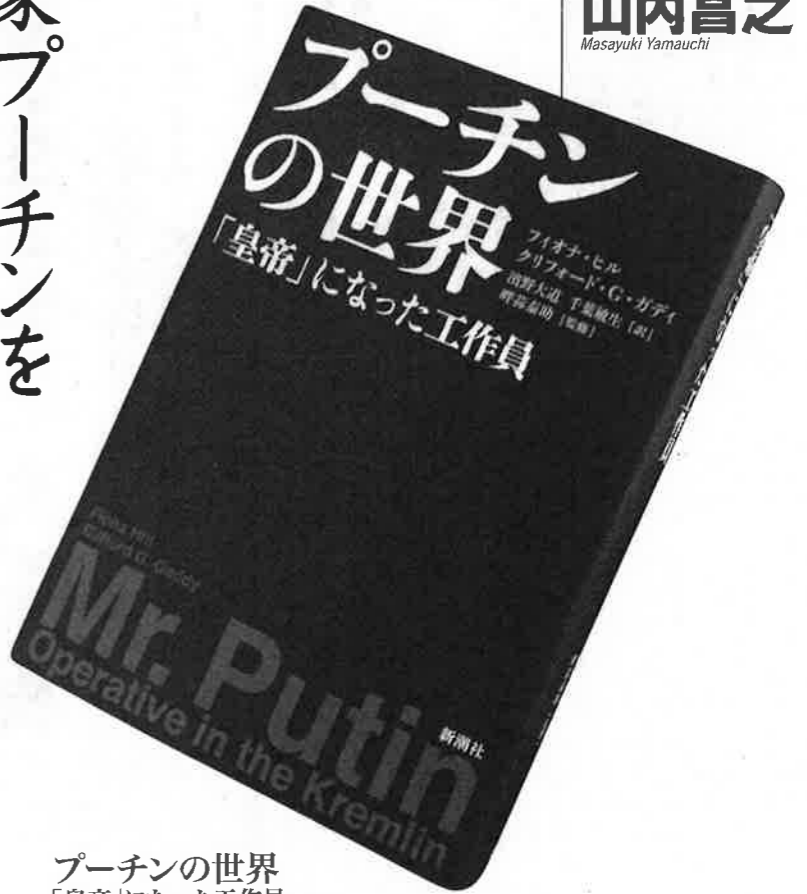


書評同人
直部 直
Tadashi Karube
平松洋子
Yoko Hiramatsu
山内昌之
Masayuki Yamauchi



プーチンの世界
「皇帝」になった工作員

フィオナ・ヒル、クリフォード・G・ガディ著
濱野大道、千葉敏生訳/新潮社/3456円

山内昌之

明治大学特任教授、東京大学名誉教授・国際関係史

優れた歴史家プーチンを知る教科書。

二〇一六年十二月に日本を訪問したプーチン露大統領の意図は奈辺にあったのか。その評価は人によって相当に分かれるに違いない。確かなことは、プーチンが日本との関係を壊すことなく、有利に関係強化を図ろうとした点である。プー

チンは、ユーラシア中心の世界を俯瞰しつつ、世界の政治家でも屈指の戦略的な思考に従って行動しているのだ。他方、日露首脳会談後の会見で「過去にとらわれることなく」「未来志向の発想が必要だ」と述べた安倍首相も、いろ

いろ批判にさらされつつ、戦略的な地球儀俯瞰外交を進めている。山口県長門市と東京での会談は、双方の戦略的感覚をそれなりに示していたといえよう。さて、本書はプーチンという複雑な多面性をもつ人物に関して、六つのベルソ

ナから論じている。それは、国家主義者、歴史家、サバイバリスト、アウトサイダー、自由経済主義者、ケース・オフイサー（工作員）にほかならない。これは、二〇〇〇年代の大半に、政治家としてロシアで絶大な権力を誇示してきたプーチンが、単純なパフォーマンスを演じたわけでないことを示している。

最初の三つは、プーチンのロシア国家観、政治哲学、第一期目の大統領時代の考えの土台になった。一九九九年に大統領代行に就任したプーチンは、「ミレニアム・メッセージ」とも呼ぶべきソ連解体後のロシアの経験と教訓を公にした。

やがて彼は、一九九〇年代のエリツィン時代のカオスを、自分の二〇〇〇年代と比べながら、ロシアの政治や経済の安定への貢献を自慢したものだ。アウトサイダー以下の三つのベルソナは、より個人的なものである。KGBのケース・オフイサーとしての経験は、彼が故郷のサントペテルブルクの行政に関わり、クレムリンの地味な職務から身を興している過程を説明する根拠なのだ。

たための一助になるだけでなく、正当性という名のマントで自分とロシア国家を覆い隠す手段にもなる。この点でいえば、とくに対日関係で歴史のカードを始終切りたがる中国や韓国の首脳と共通しているかにも見える。

た議會を仕切った最初の首相であった。彼は自由主義施策と強い国家を同時に追い求めた点でプーチンの偶像なのであり、「ドストロイカ」（建設の完成や計画の完了）の先駆者なのかもしれない。一九〇九年にストルイピンは外国人記者の質問にこう答えた。「国家に二〇年間の国内および国外の平和を与えてくれれば、ロシアは見違える姿に変わるだろう」。

しかし、大きな違いがひとつある。それは、プーチンの教養と知識の広がりとして「好都合な歴史」を操作すれば、政策を推し進める手段として有益なことまで、彼らの全員がある程度知っている。違いは、歴史は問題を解決すべき点としても、それはその時代で解決すべき点を知っているか否かということだ。

レーニンの遺体を赤の広場から撤去してはと英国人ジャーナリストが質問したときに、彼は間髪容れずに英国の議事堂の外には十七世紀の清教徒革命の指導者クロムウェルの像が今でも建っている指摘したものだ。プーチンが主張したかったのは、善悪も含めてクロムウェルの

すべてが英国の遺産であるように、恐ろしい行為をしたレーニンやスターリンもロシアの国家と国民が共有する歴史の一部だということだろう。誰もが歴史とどこかで折り合いをつけなければならず、恥じることは何もない。こうした歴史観は、イデオロギーや党派性から自由な国民であれば格別に不景なことではないだろう。まさに、映画監督のニキータ・ミハルコフがいうように、ロシア史のどの期間を見ても輝かしいページと暗黒のページがあるのだ。それらを分割していずれか一方を否定し、いずれか一方を肯定することはできないという指摘は、プーチンの考えに通じるものがある。

プーチンは当面する問題に立ち向かう際に、歴史から類似例や模範例を引き出してくる天才である。その意味で、著者たちが彼を「歴史と特別な関係を持つ歴史家」だというのは正しい。来日したプーチンが日露関係史に関する蘊蓄を披露したのは、付け刃でもなく、ましてや偶然ではなかったのである。

なかでも特異なのは、自分の運命がロシア国家の過去や定めと密接に結びついているという信念である。プーチンは、歴史認識を使って政治的な立場を強化し、重要な出来事の骨格を描いてきた。歴史は、彼自身や国家の目標を表現する

レーニンの遺体を赤の広場から撤去してはと英国人ジャーナリストが質問したときに、彼は間髪容れずに英国の議事堂の外には十七世紀の清教徒革命の指導者クロムウェルの像が今でも建っている指摘したものだ。プーチンが主張したかったのは、善悪も含めてクロムウェルの

プーチンが評価するのは、革命に頼らずして大変革を成し遂げようとしたストルイピンである。一九〇四―一四年に活躍した彼は、プーチン同様に変幻自在の国家主義者だからであろう。ストルイピンは、帝政期に一般選挙の結果に依拠し

プーチンが日露関係史に関する蘊蓄を披露したのは、付け刃でもなく、ましてや偶然ではなかったのである。